

令和 3 (2021)年度 基盤研究 (S) 審査結果の所見

研究課題名	家畜の排卵・卵胞発育制御法の開発に資するエストロゲンフィードバック機構の解明
研究代表者	東村 博子 (名古屋大学・大学院生命農学研究科・教授) ※令和 3 (2021)年 7 月末現在
研究期間	令和 3 (2021)年度～令和 7 (2025)年度
科学研究費委員会審査・評価第二部会における所見	<p>【課題の概要】</p> <p>本研究は、哺乳類のメスにおける卵胞の発育と排卵を制御するエストロゲンの正負フィードバック作用に着目し、神経ペプチドであるキスペプチンによる制御機構を、遺伝子発現やエストロゲン調節に関して解析しようとするものである。ウシやヤギなど家畜における実証研究により、家畜の排卵・卵胞発育障害などに対する治療法の開発と確立に資することを目指している。</p> <hr/> <p>【学術的意義、期待される研究成果等】</p> <p>世界的に関心の高い研究テーマであるが、応募者らはこれまで独自に作出したラットのモデルを用いた関連研究を実施しており、研究遂行能力は十分で、優位性がある。本研究では、これまでの研究で得られた知見をウシやヤギに適用し、畜産への展開を図る実証実験を計画しており、産業動物の繁殖障害改善に貢献することが期待される。</p>